

---

# ハヤテのごとく

N.N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく

### 【コード】

N0746K

### 【作者名】

N・N

### 【あらすじ】

ハヤテとヒナギクの恋愛物です。原作の場面から始まります。

## プロローグ（前書き）

初めて投稿した作品なので上手くできてるか不安です。誤字脱字があつたらすみません。  
では、どうぞ。

## プロローグ

ここは、アテネ市街。

そこにある一つのレストランで一組の男女が食事をしていた。

正確に言うと一人が食べ、一人が料理を作っていたのだが、そこはツツコマないでござい…。

「ヒナギクさん料理のお味はどうですか？」

紹介しようこの人は綾崎ハヤテ。三千院家の執事をしている。

「ええ、とってもおいしいわ。」

ちょっと赤くなりながら答えたのは桂ヒナギク白皇学院生徒会長で剣道部の部長で、そして、かなりの負けず嫌いである。

ピキッ（なんか、頭にくることを言われた気がするわ。まあでもそ

こはおいといて。)

(今日はハヤテ君に告白しに来たんだから!でも、どうやって告白しようかしら?なんかタイミングがつかめないわ。)

そう、桂ヒナギクは綾崎ハヤテの事が好きである。

3月3日の誕生日の日に理解したのだ。

私は、この人の事が好きなんだと。

…とまあヒナギクがどうしてこんな事を考えているのかという話は数時間前にさかのぼる。

「なんだか、今日はハヤテ君すごく元気の無いように見えるのはなぜかな?」

みなさんすぐにおわかりいただけたでしょうか?この喋り方、何でも普通が当てはまるハムスターこと西沢歩である。

「え、ちょっと作者さんその紹介の仕方は無いんじゃないかな。」

へ？

まあいいじゃないですか。

「うーん、たしかにちょっと元気がなさそうですね。」

この方はマリアさん。三千院家のハウスマイドさんである。

「なにかこの後に、憂鬱になることでもあるんじゃない？」  
ヒナギクである。

「うーん、ではちょっとハヤテ君に聞いてきますね。」

とまあここまでくればわかるだろう。まさに原作通りである。

この後、ハヤテに夜の出来事で憂鬱になっていると聞き、告白しようと思ったのである。

現在。

食事はどんどん進みヒナギクは何も言えずに終わってしまいました。

帰り道…

「ねえ、ハヤテ君。今日はどうしてもと憂鬱そうな顔してたの？」

「え！、あゝバレてましたか。顔には出さないようにしてたんですが…」

「よかったらその理由を教えてください？」

「はい。昨日久しぶりに天王州さんに会ったんですが無視されちゃってそれで少し落ち込んでたんですよ。」

(よかった。私が原因じゃないんだ。)

「それで彼女とはどうゆう関係？」

とまあここまでは原作通り。

「うーん彼女はただの幼なじみというだけですね。」

「へえーそうなんだ」

「まあ他には付き合ってたくらいですかね」

…

「って、え〜！ハヤテ君が前に言ってた幼稚園の時付き合ってたって天王州さんだったの！」

「え、ええ。そうですね。でももう別に好きではないですよ。」

（はあ…びっくりした。でも、よかったハヤテ君の好きな人じゃなく。う〜ん今から告白してみようかしら？）

「あ〜ヒナギクさん？」

「ふえ？」

「どうしたんですか？顔が少し赤いですよ。」

「大丈夫よ。それよりハヤテ君、大事な話があるの」

「なんですか？」

「いままで言えなかったけど私、ハヤテ君の事が好きなの。私と付き合ってくださいませんか？」

顔を真っ赤にしながら言うヒナギク。

次回ハヤテの返答から始まります。

## ブログ（後書き）

どうでしたか？

できれば感想などを書いていただくと嬉しいんですが…。

あと、できるだけ早めに更新するようつにしよつと思ひます。

## 第1話「返事」

「へ？」

顔が赤くなるハヤテ。

「え〜とダメかな？」

ちよっぴり不安そうな顔で言うヒナギク。

(ちよっとその顔可愛いつて)

「え〜と一晩だけ考える時間をくれませんか？」

「う〜ん。わかった」(本当はここで聞きたかったけど…)。

「すみません。明日には必ずお返事します。」

三千院家の別荘

「ただいま帰りました。」

「お帰りなさいハヤテ君、ヒナギクさん。」

「マリアさんただいま」

「あれ？お嬢様と西沢さんはどうしたんですか？」

「さっき帰宅したのですがもうお休みになられましたよ。」

「そうですね」

「あの～ハヤテ君にマリアさん？私もう疲れたんで先に寝ますね。」

「はい。おやすみなさいヒナギクさん。」

「おやすみ～」

…寝室

(はあ…明日か…ちよつぴり不安だな。  
だってハヤテ君に可愛いらしいところなんてみせた事ないしな。ま  
あ明日の事は気にせず寝よ。)

こういう場面は普通気になって眠れないんじゃないんですか？

「うるさい！バカ！」

ゴオオ

ヒナギクの体から怒りの炎が出ている。

い、いやすいません。許してください。

「問答無用！正宗！」

ギャー！

作者気絶。

一方、リビング

「どうしたんですかハヤテ君。そんな真剣な顔して。何か悩み事ですか？」

「えっ、いやちょっとヒナギクさんといろいろありまして。」

「へえ〜」

（何があったか気になりますわね。）

「もしよかったら教えてくれませんか？」

「えっ、あゝはい  
さっきヒナギクさんに告白されたんですよ。それでどうしようか迷  
ってます。」

僕には女の子を養う甲斐性がないし…」

「えっ、ええ」

ハヤテ君ヒナギクさんに告白されたんですか？」

「はい」

「それでハヤテ君なんてお返事をするつもりなんですか？」

「ええ、今それを悩んでるんです。」

「もつつ何を悩む必要があるんですか？大切なのはハヤテ君の気持ちなんじゃないんですか？」

「僕の…気持ち？」

「そうです。ハヤテ君はヒナギクさんが嫌いなんですか？」

「いえ、好きですよ。でも…」

「好きならそれでいいじゃないですか。さっきも言いましたけど大切なのはハヤテ君の気持ちですよ。」

「はい、わかりました。明日ヒナギクさんにOKと言ってきますよ。」

「それがいいですよ。」

「では、おやすみなさいマリアさん。」

「おやすみなさい。」

嬉しそうに部屋を出るハヤテ君を見送る。

(はあ…それにしてもついハヤテ君の手伝いをしてしまいましたわ。それにしてもこの事をナギが聞いたら悲しむでしょうね。  
はあ…)

苦勞の絶えないメイドさんである。

(それにしてもハヤテ君がうらやましいですわね。)

まあそれもそうでしょうね

17年間恋人がいないんですから。

「あら？どこかで嫌なことを言われた気がしますわね」

ハハハ、気のせいです。気のせい。

「まあ、私も寝ましたよ。」

……翌朝

「あ、おはようございます。ママリアさん。」

「あ、おはようございます。」

「昨日はありがとうございました。」

「いえいえ、どういたしまして。」

「おお！ハヤテ、マリアおはようなのだ。」

「ナギ。」

「おはようございます、お嬢様。今日はめずらしく早くですね。」

やっと出てきましたね。ハヤテの主である三千院ナギ  
いわゆる流行の最先端のHIKIKOMORIである。  
またヒナギクと同じく筋金入りの負けず嫌いである。

ピキッ「おい！なんだその説明は」

ゴオオ

「まあまあ、その辺にしときましようよお嬢様。」

「う、うぬ。ハヤテが言うなら仕方ないな。」

「あ！おはようハヤ太君。」

「あ！おはようございます。瀬川さん、花菱さん、朝風さん。  
こちらも初登場の生徒会三人娘である。」

「なあところでナギちゃん。今日は何をするんだ？」

「ん〜明日には日本に帰るから今日はみんな自由でいいんじゃないか？」

「うん、それがいいよナギちゃん。」

「ところでヒナと歩君は？」

「そつえばまだ見てませんね。」

「もしかするとまだ寝てるのでは？」

「なに！それではさっそくヒナの寝顔を撮ってこいよ。」

「ちょっと美希なに人の寝顔撮ろうとしてんのよ。」

「うおー！ヒナ！いつの間にか起きたんだ？」

「少し前よ。歩もね。」

と、そこに歩が入ってきた。

「よし、これで全員だな。今日はみんな自由にする。では。」

「おい！ハムスター」

「な、何かな？」

「今日もいろいろな所を見てまわるぞ。」

「え、今日も見てまわるのかな？」

「なんだ嫌なのか？」

「うづん。そんなことないよ。あつこナさんも行くじつ。」

「う〜んどうしようかしら。」

（多分ナギのことだからまたヘリとか飛行機に乗せられるんですよね）

「やめとくわ」

「そうですね。」

「よし！ではハヤテ、マリア、ハムスター行くぞ。」

「あの〜お嬢様？僕も残っていてもいいですか？ヒナギクさんを一  
人にするわけにもいかないので。」

（昨日の返事もしないといけないしな。）

生徒会三人娘はいつの間に消えていた。

「なに！ハヤテは私のところよりヒナギクの方がいいというのか。」

「まあまあナギいいじゃありませんか。」

「ぬ〜まあいいとするか。では行くぞ。」

「はい」

出ていこうとするマリアにハヤテが

「あの、マリアさんありがとうございます。」

「いえいえ〜がんばって下さいね」

驚異的洞察力でなぜハヤテが残ろうとしたかがわかったマリアであった。

その頃のヒナギク

（ハヤテ君残るんだ〜昨日の返事聞けたらいいな  
でも美希達もどっかに行つたしこれって二人つきりじゃない！）

いまさらそんなことに気がついて真っ赤になるヒナギク。

（はあ…とりあえず落ち着かなきゃ。）

とそこへハヤテが戻ってきた。

少し恥ずかしそうにしている。

「あ、あの〜ヒナギクさん？」

「何？」

「昨日の返事なんですけど…」

「へ？」

昨日の事を思い出して赤くなるヒナギク。

「もしかしてダメ…なの？」

「いえ、そんなことはないです。もちろんOKです。」

……理解するまでの一時の時間。

「え〜じゃあハヤテ君私と付き合ってくれますか？」

「はい。もちろんです。」

「わあああ」

ハヤテに抱きつくヒナギク。

「もう、とつても不安だったんだから。ハヤテ君私の事嫌いなんじゃないかって。」

「そんなことないですよ。僕はヒナギクさんが大好きですから。ちよつと顔を赤くしながら言う。」

「さあ、僕たちは歩いてアテネ市街を回りませんか？」

「うん」

凄くご機嫌なヒナギク。

「では行きましょう。」

すつとヒナギクの手を握る。

(ハヤテ君大胆だなあ。 ) と思いながら手を握りかえた。

……と、まあ次回は初デートのところから。

## 第1話「返事」(後書き)

どうでしたか？

なんか微妙な気がするのですが。

ハヤテとヒナギクの初デートもこの話に載せるつもりだったのですが予想以上に長くなったのでやめました。

次回もあまり遅すぎないように更新しようと思います。

## 第2話「デート」（前書き）

一月も待たせてしまってますいません

ホントに反省しています

一月もあいてしまったんで書き方が変わってるかもしれない

それと短めです

ではどうぞ

## 第2話「デート」

とその様子を物陰から見てる三人組がいた。

もちろん生徒会三人娘である。

「ふええんハヤ太君がヒナちゃんと付き合い始めちゃったよ」

「泣くな泉。しかしこのデートは動画研究部として撮影しなければ  
ならないな」

「ヒナには悪いけど面白そうだからな。よし、じゃあ行こう」

……場所が変わってハヤテとヒナギク。

「それで何処に行くの？」

「あそこなんてどうですか？」

とハヤテが指さしたのは喫茶店。

「いいわよ」

「よかった。断られたらどうしようかと思ってましたよ。」

ハヤテの顔を見るかぎりそうとう緊張してたらしい。

「じゃ行きましょ。」

「はい」

また手を繋ぎ店に向かって歩き始めた。

「いらっしやいませ」注文は何になさいますか？」

え〜言語については考えないでください。

「え〜とヒナギクさんは何にします？」

「じゃあ私は紅茶にイチゴのショートケーキで」

「じゃあ僕はコーヒーとチョコレートケーキください。」

「かしこまりました。」

スタスタと歩いて店員はどこかへ行つた。

「ねえこの次はどこに行く？」

「とりあえずいろんな所を回ってみましようよ。僕達ここに初めて来たんですから。」

「それもそうね」

と会話すること数分

「お待たせしました〜。それではごゆっくりどうぞ。」

「あ、ここの紅茶おいしいわ。あれ？ハヤテ君どうかしたの？」

見ればハヤテはコーヒーにもケーキにも手付かずであった。

「い、いやなんでもないですよ。」

少し赤くなりながら答えたハヤテ。

「隠さないで話さない！」

「いや、その…紅茶をおいしそうに飲んでるヒナギクさんが可愛いな〜と思っちゃって。」

「ふえー！」

みるみる顔が赤くなるヒナギク。

「まあとりあえず食べましょーよ」

「う、うん」

……と会話をしながら食べ始めること十数分。

「さあ、それではそろそろ出ましょーうか。」

「うん」

「え〜と、先ほどいろんな所を見てまわって言いましたけどほんとうどうします？？」

「それじゃあ買い物にでも行かない？」

「ええ、いいですよ」

……商店街到着。

「わあ〜すごい」

子供のように目を輝かせてるヒナギク。

（ここに来て正解だったかな。ヒナギクさんあんなに嬉しそうだし。）

「ハヤテ君、こっちこっち。ねえこれ見て。」

それはネツクレスだった。

「綺麗ですね。ヒナギクさんにあいそうです。」

「っ…もうハヤテ君恥ずかしいこと言わないでよ。」

頬が赤く染まる

「いえ本当にそう思っただけです。」

「もうっ」

ますます赤く染まっていく。

「それじゃあこれを買いましょうよ。僕からのプレゼントってことで」

「え？いいの？」

「はい。いいですよ。それに…」

「それに…何？」

「今日は僕とヒナギクさんが付き合い始めた記念の日なんだからだから僕が買います。」

「あ、ありがとうございます」

「え〜と、ではそろそろ帰りましょうか」

見ると日が傾いていた。

「そうね。あまり遅く帰ってもいけないしね。」

「では行きましょう。」

## 第2話「デート」（後書き）

どうでしたか？

デートっていうのがうまく書けてなかった気がするのですが…  
え〜ととりあえず感想待ってます

### 第3話「最後の一夜」（前書き）

お久しぶりです

また投稿するのに二週間位かかりましたね

今回は少し長めなので満足していただけたらいいなとおもいます。

もしかしたら書き方が途中から変わってたりするかもしれませんがその場合でも気にせずに読んでください

### 第3話「最後の一夜」

……別荘

「ふう、着きましたね」

「ええ、そうね。ナギ達は帰ってきてるのかしら？」

「どうぞでしょう」

と言いながらハヤテは玄関の扉を開けた。

「う〜んどうやらまだ帰っていないようですね。では少し話でもしてましょつか。」

と会話すること20分位

「ただいまなのだ。」

「あ、帰ってきましたね。おかえりなさいませお嬢様。」

「おかえりナギ。」

入ってきたのはナギにマリアに歩。

「おお、ハヤテ、いまから一緒に遊ぶぞ。」

「はい、お嬢様」

(ヒナギクさん、今日の事はまだお嬢様に言わないでくださいね。いつか自分で言うので。)

(わかったわ。)

「何を二人で話しているのだ。」

ナギが不機嫌な顔をして見ていた。

「な、なんでもないですよ。」

「ところでお嬢様。今日は最後の夜なのでみんなで遊びましょうよ。」

「なにを言っているのだハヤテ。そんなの当たり前ではないか。」

少しキョトンとした顔で言った。

「そうですね。それで具体的に何をするんですか？」

「まあそれよりも先にご飯を食べるぞ。お腹すいたのだ。」

「わかりました。すぐに作ります。ところで花菱さんと瀬川さんと朝風さんはどうしたんでしょうか？」

「ん、まだ帰ってきてないのか。」

「そういえばみてないわね。」

「そろそろ帰ってくるんじゃないかな。」

ガチャ。

玄関の方から音がした。

「お、噂をすれば帰ってきたな。」

「ただいま〜」

「「おかえりなさい！」」

「よし、これで全員そろったな。じゃあ今からご飯を食べた後なにをして遊ぶのか決めるのだ。」

「また花火をするのはどうかな？」  
と歩。

「うぬ。それもいいがそれはもう少し後にする予定だ。」

「じゃあトランプなんてどう？」

とヒナギク。

「お、いいではないか。みんなはどうだ？」

「「賛成！」」

「「ご飯できましたよ〜」」

「おお、さすがハヤテとマリアだ。早いのだ。」

「ほんと早いわね。」

「よし、トランプで具体的になにするかは後で決めるのだ。」

「それじゃあ……」

「「いただきます」」「」

……夕食後。

「ではこれより大富豪をする。人数が多いから2つに分けて上位二人と下位二人が入れ替わるようにする。よし、じゃあまずは組分けからだ。どうやって決めるのがいいか意見はないか？」

「じゃんけんなんてどうかな？」

「ん？なんか定番すぎて面白くないがまあいいだろう。それじゃあいくぞ……」

「「じゃんけんポン。」」

…結果一つ目ナギ、ハヤテ、マリア、ヒナギク。二つ目美希、泉、理沙、歩。

「組分けも決まったし早く始めましょ。」

「そうだな。それじゃあ開始。」

作者の都合で大富豪の中身はカットさせてもらいます。

(おい！いいのか？それで)とその場にいた全員が思った。

……大富豪開始後一時間後。

「ねえナギちゃんそろそろ飽きたよ〜」

現在の時刻20時

「うむ。そうだなそれじゃあトランプやめてまた花火でもするか。」

「賛成」

「いや〜ミコノス島でやった花火を思い出すな〜」

「あの時のナギちゃんの花火芸は面白かったな〜」

「ならまたやるのだ。」

「「おお〜」  
パチパチと拍手。」

「それでも護りたい世界があるんだ〜」  
しほぽほぽ

「命は何にだって一つだ。だからその命は君だ。彼じゃない。」  
しほぽほぽ

「このバカ野郎！」  
しほぽほぽ

「トラ ザム、ラザー」

しほはほほ

「どうだ？ミコノスでやったやつ以外にレ エンドとデス イニ  
との戦いを追加したのだが。」

「いや、やっぱり最高だねナギちゃんの花火芸は」

とナギ達が騒いでる一方で……

「綺麗ね」

と手に持った花火を見ながら言うヒナギク。

「そうですね。」

「今日はありがとハヤテ君とっても楽しかった。」

「そうですか。よかったです。またいつかデートしましょう。」

「うん」

ひゅん

ドッカン

「あ！打ち上げ花火。」

「マリアさんがやったみたいですね。」

（ハヤテ君と二人つきりでこんな光景が見れるなんて旅行に来るまでは予想もできなかったな。がんばって飛行機に乗って来たかいがあったわ。）

「そろそろみんなのところに行きましょっか」

「そっね。」

「ハヤテ、ヒナギクこっちで一緒に線香花火やろっ。」

「はい、お嬢様。」

チリチリ、チリチリ  
ポト

「にやははは私もう落ちちゃった。」

「まだまだだな。泉は」

ポト。

「あー！」

「美希ちゃんも人の事言えないよ。理沙ちゃんががんばれ。」

「よし見てる泉。」

ポト

「あゝあ。落としてしまったな。」

少し悔しそうな顔で言う理沙。

「気にしない、気にしない。花火はまだまだたくさんあるんだよ。」

「そうだな。よしもう一回挑戦だ。」

……

「よし、ハヤテどっちが最後までもつか勝負するのだ。」

「はい、いいですよお嬢様。」

「あ、待って私もやる。」

線香花火を持ちながらヒナギクが近づいてきた。

「……………」

パチッパチ

花火の音だけが聞こえる。

誰もがみんな楽しそうな顔をしている。

トウルルルル

その静寂を破るかのように鳴った電子音。

鳴ったのはナギの携帯。ナギはちよつとめんどくさそうな顔をして電話にでる。ちなみにナギの線香花火は携帯が鳴ったのにびっくりして落としてしまった

「あ、もしもしナギかいな？」

「ピーお掛けになった電話番号は電波の届かない場所にあるか電源が入っていないためつながりません」

「おい、ちよつナギ待たんかい。何怒つちよるんかいな？」

「うるさい！お前のせいで線香花火を落としたではないか！」

「まあまあそうゆうなや。ところで伊澄さん捕まえたからそっちに  
行ってもええんかいな？」

「ん？いいぞ。」

「ほな今から行くで〜」

「お嬢様。いつたい誰からの電話だったんですか？」

「咲からだ。いまから伊澄と来るらしいぞ」

「へ〜そうなんですか」

…数分後

「ナギ〜来たで〜」

「ん？遅かったな。」

「アホか。ミコノスからここまで数分で来ただけですこいやんけ。」

「ジェット機を使えばそんなもんだが？」

「ハヤテ（え〜やっぱり三千院家ってすごいですね〜）」

と思いながら和服の少女に挨拶をした。ナギと咲夜は二人で会話をしている。

「こんばんは伊澄さん。こんな時間にどうしたんですか？」

「ハヤテ様…いえ…咲夜が行こうと言っつので…」

「でも伊澄さんが迷子になってなくてよかったです。」

「伊澄さんはきちんと迷子になったぞ。」

いつの間にか咲夜がナギとの会話を終えて近づいていた。

「あ、やっぱりそうだったんですか。」

「なにを言ってるの咲夜。私は迷子になんかなくてないわ。」

ハア…（この自信はどこからでる）のでしょう（んや）

二人は揃ってため息をついた。

「ところでみんなは花火をやってるんやな。」

「そうですね。」

「なんでみんな手持ち花火をやってるんやねん。ここはやっぱりウチの誕生日ん時みたいに打ち上げ花火やるんが普通やろ。」

「それならさつきマリアがやったぞ。」

「まだまだやもつとやるんや。」

「まあいいが勝手にやってくれ。」

「まかせときな〜」

「ヒナギクさん、どうやらまた打ち上げ花火をやるみたいですよ。」

「さすがお金持ちね〜」

「そうですね。」

ふとヒナギクの首に今日買ったネックレスがかかっているのに気づきボウとそれを眺めた。

「どうしたの?」

心配そうな顔をしてこちらを見ていたヒナギクに気づいた。どうやら何回か話し掛けられて反応しなかったらしい。

「いえ、今日買ったネックレスを着けてくれて嬉しいなと思ってただけですよ」

予想外な答えだったのかヒナギクは顔が少し赤くなっていた。

「どう?似合ってる?」

恥ずかしそうに聞くヒナギク。

「とても似合ってますよ。」

笑顔でそれに答えるハヤテ。

もはや二人の空間って感じだ。

とまあそんな雰囲気は長続きするはずもなくナギがやって来た。

「おいハヤテ、こっちで一緒に花火を見ないか？」

「ええ、いいですよお嬢様。」

嬉しいのか笑顔のナギ。

「私もいいかしら？」

雰囲気壊されたのが嫌だったのかちょっと怒り気味な顔だ。

「え〜」

あからさまに嫌そうな顔のナギ。

「そんなこと言わずに皆で見た方が楽しいですよ」

苦笑いしながら説得するハヤテ。

「む〜ハヤテがそう言うならいいが。」

（せっかくハヤテと二人で花火が見れると思っただのに…）

（やった〜ハヤテ君とまた一緒に花火が見れるわ。二人っきりじゃないのが残念だけど。）

正反対の事を考えてる二人であった。

その後は何もなく咲夜が上げる打ち上げ花火を見ながら皆で楽しく  
過ごし、疲れたのかすぐに寝てしまった。

### 第3話「最後の一夜」（後書き）

どうでしたか？

この一話だけの文字数で他の話の文字数を束ねたくらいの量になりました。

本当は日本に帰るところまで書きたかったんですけど次話にまわしました

それでは評価、感想待ってまゝです

#### 第4話「GWの終わり」

ふああそついえば昨日は疲れたのかすぐに寝ちゃったんだっただな。

現在の時刻5・30さすがハヤテである。

「今日で海外旅行も終わりか〜なんかいろいろあったな」

一人呟くハヤテ。

まあそんなことを思いながら台所へ。やはり執事なので朝食を作るのだ。

朝食を作る準備をしていると誰かが台所に入ってきた。

「あ、おはようございますハヤテ君。さすが今日も早いんですね。」

「おはようございますマリアさん。」

「さあ朝食を作り始めましょうか。」

「そうですね。」

と二人で料理をしていると皆がぞろぞろと起きてきた。

昨日に続き今日もナギは珍しく起きてきた。

そして皆で朝食を食べ、飛行機に乗って日本に帰国した。  
若干一名気絶しかけたのは言うまでもない。

日本に着いたのは夜中。時差の関係である。

「それじゃあ皆さんまた明後日学校で会いましょう。」

「じゃあね〜ハヤ太君。」

「ナギ明後日学校サボらないできちんと来るのよ。」

「ん〜気が向いたらな〜」

「ほな〜皆解散ってことで」

「バイバイ」

……………桂家

「ただいま〜」

小声で言った。

さすがに夜中じゃ起こしちゃうまずいしね。

と思いつながら自分の部屋に行きベッドにダイブそしてそのまま寝てしまった。

…………… 三千院家

「ただいま」

「さあ一応いま夜中だから私は寝るぞ。」

「おやすみなさい、お嬢様。」

「ナギが寝るなら私も寝ますね。おやすみなさいハヤテ君。」

「おやすみなさいマリアさん。」

「ふう」

現在自分の部屋にいるハヤテ。

「今回の旅行本当いろいろあったな」

あーたんに会ったりヒナギクさんに告白されたりデートしたり。

「んーなんかお嬢様となにもしてないきがするな」

明後日から学校。明日がGW最終日。

「まあいいやもう寝よう。」

…翌朝。

もちろんいつものごとくハヤテとマリアが料理を作っている。

そしてまたしてもナギが朝早くに起きてきた。

さすがに3日連続は驚くはずで二人は声もでない。まあ勿論ナギはそれが不満だったらしくて少し怒っていた。

「ハヤテ今日は私と一緒にゲームをして遊ぶぞ。」

「わかりました。お嬢様。」

とまあ様々なゲームをして遊び現在は夜中。

さすがに明日から学校なので勉強することにしたハヤテはナギに断つて自室へ行った。

ナギはする事が無くなったのでマリアに添い寝をしてもらい二人一

緒に寝た。

……ハヤテの部屋

カリカリカリカリ

部屋の中でハヤテが文字を書く音が聞こえる。ナギとマリアと別れて勉強を始めて約一時間、シャーペンを動かす音が止まった。

（明日から学校だな。ヒナギクさんと一緒に行けたらいいけど…やっぱりお嬢様と一緒にいけないうな。まあGWが終わった後だから休むとかお嬢様は言いそうだけど。とりあえず明日も早いからもつ寝よう。）

パチッ

ハヤテの部屋から明かりが消え三千院家に静寂が訪れた。

……桂家

ヒナギクは勉強しながらも今朝の事を思い出していた。

今朝は朝起きてお義母さんと朝食を食べていると旅行での話になってお義母さんが突然

「綾崎君とは何か進展はあった？」って聞いてきた。なんでハヤテ君達も一緒にいたのを知っているのか気になったから聞いてみたら  
「ひ・み・つ」

ってウインクされながら言われた。

ていうかそれ以前に私がハヤテ君のことが好きだって知ってるのは歩だけのはずなんだけど。

それで旅行でのことを話たらずごくよろこんでくれた。

「ヒナちゃんにもようやく彼氏ができたんだ〜」とかいって。

「ん〜そろそろ寝ようかな」

時間はもうすぐ日付が変わる時間帯だった。

ヒナギクは電気を消して寝た。

#### 第4話「GWの終わり」（後書き）

どうでしたか？

GWの最後たいしたことが無くてすみません

次回はいよいよ白皇学院での話が始まります  
でも上手く書けるかわかりません  
もし面白くなかったらすみません

では評価、感想待ってます

第5話「登校」(前書き)

今回はかなり短めです

## 第5話「登校」

ハヤテは現在ヒナギクの家の前にいる。なぜこんなところにいるのか  
というところ

……翌朝

朝起きてマリアさんと朝食を食べて学校に行く準備をしているとマ  
リアさんが

「ナギは今日学校休むみたいですよ。GWの次の日くらい休ませろ  
っていつてました。がんばって説得したんですけど。ほんとあの子  
には困りましたね。」  
ほんとに困った顔をしている。

「あ、やっぱりお嬢様はお休みするんですね。」

「やっぱり？それってナギが休むことを予想していたってことでは  
か？いけませんね悪いほうばかり考えていたらナギの執事失格です  
よ。」

マリアはハヤテのネクタイを引っ張りながら言った。

「く、苦しいです。」そうとう苦しいのか顔が引きつっている。

それが数秒続いたあとさっきとは打って変わったような笑顔でマリ  
アが

「では、罰として・・・女装というのを考えたんですけど旅行でもしてもらったしあまりさせるのもハヤテ君がかわいそうなので・・・今日はヒナギクさんのところへ行ってあげてください。」  
「えっいいんですか？」  
こんな罰があるのだろうかといった顔でマリアを見るハヤテ。

「はい、いいですよ。でも早く行かないとヒナギクさん、もう家を出てるかもしれませんよ。」

「そうですね。では行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

という訳である

(いざ家に来ると緊張するな。よし、押そう。)

とハヤテがインターホンに指を置いた瞬間、

「行ってきます。」という声があったと同時に玄関の扉が開いた。

「あ!」「」

ハヤテとヒナギクはどちらともつかず声を上げた。

「ハヤテ君どうしたの?私の家の前で」

「今日はお嬢様は学校をお休みするらしいので一緒に学校に行こうかと」

「え、ほんとに?うれしい」ヒナギクは満面の笑みだ。

「ちよつとヒナちゃん玄関前で止まってどうしたのよ?」

「え?なんでもないよお義母さん。」

まあここで引き下がるヒナ母なわけはなくひょっこりと玄関から顔を出した。

「あら綾崎君じゃないのヒナを迎えに来たの？」

「は、はい」

「よかったわね〜ヒナちゃんそれじゃあ綾崎君ヒナをよろしくね〜  
ヒナ母もうれしそうだ。」

「わかりました。行きましようヒナギクさん。」

「うん」

二人は学校に向かって歩き出した。

## 第5話「登校」(後書き)

どうでしたか？

GW中には続きを投稿しようと思っていたのですが、長に待っていて下さい

では評価感想待ってます

第6話「やまない噂」(前書き)

す〜くお待ちせしましたそのわりには短いんですけど…

これからはきちんと更新しようと思います…

## 第6話「やまない噂」

ハヤテとヒナギクは現在一緒に登校中。他愛のないおしゃべりをしている学校に到着。

ハヤテとヒナギクが通っている学校・白皇学院はお金持ちの通う超名門の学校である。敷地はかなりの広さで校内に路面電車が走っているほどだ。学校の校舎に向かって二人が一緒に歩き出すと周りにいた生徒たちがクスクス笑ったり冷たい視線でこちらを睨んでいた。もちろん睨まれていたのはハヤテだが

「なんなんでしょういったい。僕がなにかしたんでしょうか？ なにか知りませんかヒナギクさん」

「うーん」

考え込むヒナギク

そこに一枚のビラがヒラヒラと目の前に落ちてきた。それを拾って読んでみたハヤテは愕然とした。「あ、あのヒナギクさんこれ・・見てください」

さつき拾ったビラをヒナギクに渡した。

「え？これって・・」

そのビラにはこんなことが書かれていた。

『綾崎ハヤテと桂ヒナギクは付き合っている。』

そしてアテネの街でしたデートの写真が載っていた。「なんなのよこれは」

かなり怒ってるヒナギク。

「ん〜でもこれを作った人もバカですね。こんな写真載せたらすぐに犯人が分かっちゃうじゃないですか。」

少し呆れるハヤテ。

「そうね。あの三人には何か罰が必要かしら？」

「とりあえず、三人を探しましょうよ。もしかしたら三人じゃないかもしれないよ。」

「そうね」  
ハヤテとヒナギクは自分たちの教室まで歩いていった。その途中でたくさん生徒と出会い睨まれたり、からかわれたりしたのは余談である。

教室に着いたハヤテとヒナギクは早速三人を探す…

しかし一向に見つからない…

どうやら危険を感じて逃げ出したらしい…

「はあ…困ったわね…」

時刻は既に昼休み

教室や外で昼食をとるのはいろいろと面倒なので時計塔に来ていた…

ハヤテやヒナギクは既にクタクタだ…

授業のたんびに生徒だけでなく先生にもからかわれるのだから…

「本当にこれには困りましたよ…」

滅多に怒らないハヤテが少し怒りながら言う。

「ところでハヤテ君…お弁当はどうか？」

そう、ハヤテが食べている弁当はヒナギクの手作りの弁当なのである。

「とってもおいしいですよ…さすがヒナギクさんです！」

それを聞いてヒナギクは顔が赤くなる

「あ、ありがとう…」

「そろそろ昼休みも終わりますね…」

ちよつと憂鬱な顔をして言う…

「そうね…まあとりあえず午後の授業もがんばろ」

笑顔で言うヒナギク。

そして時計塔から出て授業へと向かう二人であった…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0746k/>

---

ハヤテのごとく

2011年1月20日17時35分発行